

### 第一百十二回 高尾山信徒峰中修行会

六月三日(土)〜四日(日)

入梅の高尾山へ一泊し当山独自の滝行をはじめ、月輪観・写経・法話の聴講等を実践する精神修養の行事として「高尾山信徒峰中修行会」を来たる六月三日〜四日に開催します。

高尾山に広がる大自然全体を修行道場として、高尾山御本尊・飯縄大権現様に身をまかせ、古来より伝承される修行の方法を実践し、激動の現代社会に生きるご自身の心を静めてみませんか？

老若男女を問わず初心者の方も歓迎します。参加ご希望の方は、ハガキに郵便番号・住所・氏名・年齢・性別・生年月日・電話番号を明記してお送り下さい。(尚、小学生以下の参加は保護者の同伴が必要となります。)

皆様方のご参加をお待ち申し上げます。  
\*お電話にての申込みはご遠慮下さい。  
\*請書は締切り後、発送致します。

日程表	
<b>6月3日(土)</b>	<b>4日(日)</b>
9:30 高尾山麓不動院 集合・受付	5:00 起床 床
10:00 開会式	5:30 朝勤・諸堂参拝
10:30 行程説明/修行についての心構え説明	7:00 朝食
11:00 昼食(各自持参弁当)	8:00 写経
11:30 回峰行	10:00 法話聴聞
12:30 両滝にて水行	12:00 昼食 山
14:30 両滝道場発足/男女で分ける	13:00 食大護摩
15:30 両滝道場発足/仏舎利にて合流	14:30 紫燈大護摩
17:00 薬王院到着	15:30 閉会式
18:00 夕食 呂	
18:30 風 輪	
20:00 月 輪	
21:00 就 寝	



### おはなし散歩道 花の赤鬼

八王子市 池田美絵

ある昼さがり。赤鬼が小春日和に誘われて、山からおりてきた。

河原にごろんと横になると、大あくびをひとつ。「あーあ、気持ちいい。さらさらと流れる水音がこちよよく、ひとたび目を閉じると、とたんにまぶたが重くなってきた。赤鬼はいつの間にか眠りこぼした。

すると川上から一匹のカッパが泳いできた。「よくもまあ、こんなでつかいきゆうりがあるもんだー。美味そうだから」とカッパは、赤鬼が胸にかかえている金棒が大きなきゆうりに見え、奪おうと思ったのだ。そして、水中から細い腕を伸ばし、ぐいっと金棒をひっぱった。ガラ、ガラ、ガラ、ガラ。金棒が岩に当る音で、赤鬼は目をさました。

「こら、待て、待てー!」あわてて飛び起きたものだから、赤鬼は岩場で足をすべらせた。

ガッン! ポキッ! 「いたっ!」岩に頭をぶつけた赤鬼は、頭に一本突き出たツノを折ってしまったのだ。

「もう!」赤鬼は悔しがって地団駄をふんだが、カッパは川下へと流れていった。いねむりさえしなればよかったと後悔したが、後の祭り。ツノをなくして岩山に帰った赤鬼を見て、仲間鬼たちは腹を抱えて笑った。日ごろからいばり散らす者など一人もいなかっただけである。威厳をなくしてしまった赤鬼は、岩山を下りるしかないと思った。そして、山を下りると、ふもとに

### 高尾山山内八十八大師巡拝のご案内

多くの方が参拝できますよう左記のようにつのグループに分け、途中(山上十二丁目茶屋前第十七番札所)で合流し、いっしょに巡拝致します。

A、従来通り、不動院から歩く。  
B、ケーブルを利用する。  
(蛇滝周辺のお大師様は巡拝できません。)

\*ケーブルを利用する場合、代金は自己負担になります。

行程 五月九日(火) 山麓不動院↓琵琶滝コース↓琵琶滝↓仏舎利塔法堂↓本堂(お護摩修行)↓坊入(昼食)↓下山(一号线)↓不動院着(法堂)↓解散

参加費 五千円(昼食代、保険料含む)

集合場所 山麓不動院(八時半集合)

申込方法 ハガキに郵便番号、住所、氏名、生年月日、性別、電話番号を明記の上、左記までお申込み下さい。

締め切り 四月二十八日(金) 一九三二八六六六

八王子市高尾町二七七 大本山高尾山薬王院 八十八大師係

\*電話でのお申込みは承り兼ねますのでご了承下さい。

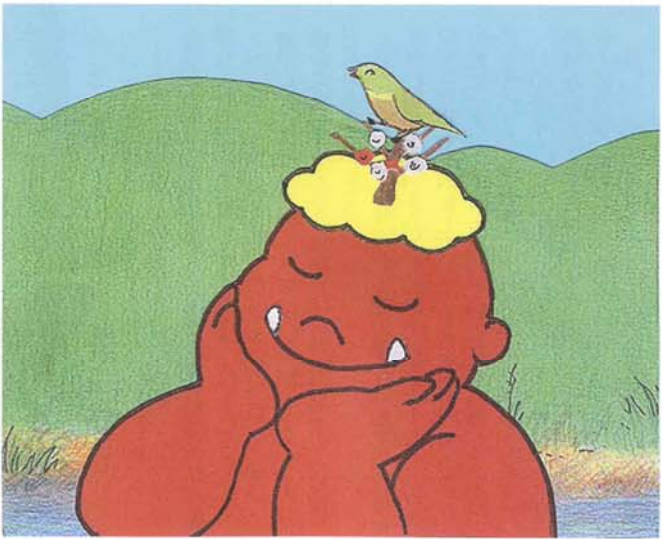
\*申し込み締め切り後、請け書(行程表・持ち物等)をお送り致します。

穴をみつけ、そこをすみにかした。

ある日、穴の入り口に一本の黒い枝が落ちていた。一尺ほどの細い枝だった。赤鬼はそれを拾いあげると、「ないよりはまし」と、ツノが折れた先にさしこんでみた。枝はびたりとおさまる。

秋が過ぎ、冬が来ると、赤鬼はやせこけ、以前のような風貌ではなくなった。木の実を拾ってほぼほと生きながらえていたのだ。

春のあたたかな空気がただよいはじめたころだ。赤鬼は自分の頭がむずかゆいような気がして手をやった。なんだか、ツノにさした枝が、少し太くなってきたようにも感じる。しかも、ところどころにでっぱりがある。枝がどうなっているのか知りたくて、ツノを失ったあの川原へと歩きだした。水面に自分を映して確かめたかったのだ。そして、河原にひざまずき川面をのぞきこむと



……。枝先に桃色のつぼみがついていた。赤鬼がツノにさしたのは梅の枝だったのだ。

「花が咲きそうだね!」赤鬼は楽しくなって、しばらくぶりに声を出して笑った。

やがてつぼみは次から次へとほころび始めた。すると、一匹のうぐいすが

頭の梅の木に止まった。

「ホーホケキョ、ケキョ、ケキョ。すき通った声に赤鬼はうつりした。

鬼の威厳はなくなってしまうけれど、花の咲くツノも悪くないのではないか。赤鬼は独りごちた。

(さし絵:小出 茂)